

ベア・ブライアントのフットボール論
Paul William Bryant's winning football.

1K03B117-1 高橋 奨

指導教員 主査 堀野 博幸 先生 副査 吉永 武史 先生

【目的】

アメリカンフットボール日本代表は、IFAF アメリカンフットボール世界選手権において、1999年にイタリアのパレルモにて開催された第1回大会、2003年にドイツのフランクフルトにて開催された第2回大会と大会連覇を達成したものの、アメリカ合衆国代表が初参加した日本の神奈川県川崎市にて2007年に開催された第3回大会では、アメリカ合衆国代表に20対23にて敗戦し準優勝となり、2011年にオーストリアのウィーン、インスブルック、グラーツの3都市にて開催された第4回大会では、予選リーグにてカナダ代表に24対31と敗戦し、第3位という結果で大会を終えた。この大会は、決勝にてアメリカ合衆国代表が50対7という大量得点差にてカナダ代表を降し、連覇を達成したが、私は、日本代表がアメリカ合衆国代表に技術理解で劣っていたとは考えていない。

アメリカンフットボールにおいて、日本の選手たちは、アメリカ合衆国のトップクラスの選手とはフィジカルに差があり、重量とサイズで追いつくには、途轍もない時間と努力が必要となる。重量とサイズが劣っていることを前提に、技術とスピードとメンタルを生かした日本代表としてのアメリカンフットボールを模索し、確立すべきだ。そのためには、高度なチーム技術の理解はあるが、基礎に対する共通理解がおおいに不足している日本アメリカンフットボール界が、今一度、基礎を確認しなければならないと考えたことが、本研究の動機だ。

本場アメリカ合衆国にて、最も信頼されているアメリカンフットボール・コーチングの指導書のひとつに“Bear Bryant on Winning Football” (Bryant, 1983)があげられる。またしても日本代表が同様の要因での敗戦を繰り返すことのないよう、また、指導者が基礎に対する共通理解を得られるよう、ブライアントのアメリカンフットボール論を見詰め直すことによって、日本のアメリカンフットボール界への今後の指針に対する提言となるのではないだろうか。

また、ブライアントは「フットボールは単なるゲームで

はない」(ブライアント, 2010)と選手に自分自身への挑戦を説くのにふれていた。アメリカンフットボールに限らず、コーチングを考察するにあたり、ブライアントのアメリカンフットボール論を概括することは、大きな意味を持つのではないだろうか。

【方法】

本研究は、ブライアントが著した指導書および関連した文献を収集し、分析・考察を進めていく。

第一章においては、ブライアントのフットボール論の規定を明らかにする。そのために、ブライアントが、なぜスポーツ競技の中でもアメリカンフットボールであるのか、どのように勝者を築くための哲学を規定し勝利するための理論を構築していたのかを明らかにする。

第二章においては、ブライアントのコーチング論の規定を明らかにする。そのために、ブライアントが、どのようにコーチングスタッフを最大活用したか、どのような計画(プランニング)を行ったかを明らかにする。

【結果】

ブライアントのフットボール論は、勝者となるためのプログラムを規定し、その結果、チャンピオンとなることを追求したものだったが、それはフットボール・フィールドの上だけでなく、人生そのものに追求をしたものだった。よりよい人間となり、勝利へ努力することに対して勇気を与えるものだったとも言えよう。

また、コーチング・スタッフに責任を委譲し、ゲームプランを組み立てていく手法も興味深いものだった。コミュニケーションをとることの重要性を再三に渡り口酸っぱく繰り返し、すべての知識と時間をゲームプランの作成に注入する決意と情熱がなければ、コーチをつとめることができず、チームとしてもゴールに辿り着くことができないことをブライアントは示した。

勝利を追求しつつ、しかしそれでいて勝利はすべてではない。これがブライアントの結論とも言えるフィロソフィーである。